

約束 龍口直太郎 訳

私の妻というのは、約束をしても、けつして時間通りに来たためしのない女である。従つて、クラリッジ・ホテルでおひるを一緒にする約束をして、十分おくれてそこに着き、妻の姿が見えなかったときも、私は別におどろきもしなかった。

私はカクテルを注文した。ちょうど季節の盛りだったので、談話室にはほんの二つか三つしか空いたテーブルがなかった。軽い食事をすませてコーヒーを飲んでゐる人もあれば、私のようにドライ・マルチニをチビリチビリたのしんでいるのもいた。夏服に身をつつんだ女の姿は華やかで魅力的であり、男の連中も心をうきうきさせていた。しかし、ずっと見たたところ、妻を待つ十五分ほどの間、私の興味をひくような姿はひとつも見当たらなかった。かれらはすらりとして、見た目にも気持ちよく、身なりもよく、気楽にくつろいでいたのだが、たいていはみんな同じような型の人間だったので、かれらを眺めている私の気持ちも、好奇心というよりは、むしろ大目に見てやるといったものだった。しかしもう二時にもなつていたので、私は空腹を感じていた。

妻は、トルコ玉の指輪は緑色が強くなつてゐるし、腕時計もよく止まるので、どのどちらも使えないとこぼしていた。そして、このことを運命のいたずらのせいにしていた。私とすれば、トルコ玉のほうは別に文句ないとしても、時計はネジを巻けば使えるのに、ときには思ふのである。

そんなことをいろいろ考えていると、ボーイがそばへやってきて、およそこのホテルのボーイでも気取つてやるあのいかにも意味ありげなひそひそ声で（まるで、かれらの伝言が、そのことばにあらわされている以上の悪い意味をもつてでもいるかのように）、私にこう告げた――

「ただ今、ご婦人の方からお電話がございまして、やむをえない用事でひきとめられ、ご昼食をご一緒にだけないそうでございます」

私はちよつとためらつた。混んでゐるレストランで一人ぼっちの食事をするのはあんまりぞつとしないし、かといつてクラブへ行くとなれば、もう時間がおそい。けつきよく、このままここにゐるほうがよさそうだということになった。私は食堂のほうへぶらぶら歩いて行つた。一流のどこのレストランのボーイ長に

自分の名をおぼえられているということに、なんら特別の満足感などおぼえたことのない私ではあるが（世のお上品な方々のうちには、そう感じる人がなかなか多いらしいが）、このときばかりは、こんな冷たい眼差しを向けられなかったらどんなにかうれしかったらうにと思つた。こわばつた、いかつい顔をしたそのホテルのボーイ長が、テーブルは全部ふさがつていますよ、と私に告げた。私はがっかりしながらも、そのひろびろとして立派な食堂を見わたした。そのときフト幸いにも知つてゐる人の顔をみつつけ出した。その人はエリザベス・ヴァーモント夫人といつて、私とは古い友達の仲だった。私を見ると、彼女はニッコリ笑つた。彼女がたつた独りでゐるのを見てとると、私はつかつかと彼女のほうへ近づいた。

「お腹の空いた男をあわれと思し召して、あなたのお隣に座らせていただけますまいか？」

「さあどうぞ。でもあたしのほうはもう終わりがけておりますのよ」

彼女は大きな柱の横にある小さなテーブルに陣取つてゐた。そして、私がそこにすわつたとき、こんなにも大勢の人がゐるのに、自分たちふたりつきりであるような感じがした。

「こりやまつたく幸いでした。なにしろひもじくつて倒れそうだったものですから」

彼女はとても好感のもてる笑顔を見せた。それは彼女の顔をいっぺんにパツと明るくするようなものではなくて、むしろだんだん魅力顔を顔全体に溢れさせるような感じだった。その微笑みはしばし唇のあたりにためらつてゐると、やがてそれはあの大きな輝いた眼のほうに移り、そこになごやかな形を作つてとどまつてゐた。このエリザベス・ヴァーモントが、ありきたりの型の女だと断定できる人はおそらくいないであろう。私は彼女の少女時代のことを全然知らないのだが、多くの人の話によると、彼女はそれこそ愛くるしい女の子で、見る人の目に涙を催させるほどだったそうである。実際その通りだっただろう、と私にも充分にうなずけるのである。いまではもう五十に手の届く年齢ではあるが、それでもなお類まれな美しさを保っているからだ。彼女の豊醇な美しさにくらべると、若い娘特有の、新鮮な、花の咲きかかったような美しさは、なんとなく気の抜けた物足りなさを感じさせるのだった。私は、誰もが同じような顔に見えてしまうような白粉を塗りたくつた顔を好まない。女の人が白粉や頬紅や口紅をつけて、その表

情に生気を失わせたり、個性をぼやかしたりするのは、どうも馬鹿げていると思う。

エリザベス・ヴァーモントも化粧はしていたが、それは自然を模倣するためというのではなく、かえってそれをひきたたせるためのものであった。そういう化粧の仕方を、相手はかれこれ問題にするようなことをせず、ただ、できあがった結果を称賛するだけだった。彼女が化粧品を使うこれ見よがしの大胆さも、その整った顔の個性を減じているどころか、却ってそれを一段と引き立たせているようだった。髪の毛は染めていたらしいが、黒ぐろと、つややかに輝いていたかのじよはまっすぐな姿勢ですわっていたが、そのようすは、まるでだらしなくよりかかるところなど一向ご存じないといった風だった。彼女は黒じゆすの服を着ていたが、その簡単なデザインはみごとだった。首には長い真珠の首飾りをつけていた。彼女の身に付けた宝石といえば、そのほかには結婚指輪を飾っているとてもおおきなエメラルドだけだったが、そのくすんだ光は、彼女の手の白さをひときわひきたせていた。しかし彼女の寄る年波をいちばんはつきり示しているのは、マニキュアを施した赤い爪をもつその手であった。若い娘特有の、柔らかい、愛くるしい、くぼみのついたまるみはもろなくなっていた。その手を見ると、誰でもある種の身憚いを感じないではいられなかった。猛禽の爪のように見える日も、それほど遠くはないような気がするのだった。

エリザベス・ヴァーモントといえば、ずいぶん評判の高い女性だった。七代目アース公爵の娘として生まれ、十八の時、大変な金持ちと結婚したが、たちまち奢侈逸楽の生活へ踏み出したのである。彼女はあまりにも気位がたかくて、用心深く行動するということがなく、あまりにも無鉄砲で、ことの成行きなど気にしないほうだったので、二年とたたないうちに、彼女の夫はおそろしいスキャンダルのゆえに彼女を離婚してしまった。その離婚訴訟に関係のあった三人の共同被告人のうちの一人と結婚した彼女は、一年半もすると、その男からも逃げ出した。

その後は、手当たり次第に愛人を作った。彼女はそうした不品行で悪名をとどろかせたのである。その目覚ましい美貌と乱交は、世人の目をそばだたせ、ひとの口の端に上るような噂の種をまかぬ時とてなかった。彼女の名前は、お上品な人たちにとっては、鼻持ちならぬものだった。ばくちは打つし、浪費はするし、淫奔な女でもあった。しか愛人たちには必ずしも誠実ではなかった彼女も、友達だ

けには忠実だった。従って、たとえどんなことをしてかしても、彼女がとてもいい人間であるという以外の批評を許さないような友達がいっても二、三人は残っていた。彼女は率直さと元氣と勇氣を持っていた。絶対に偽善者ではなかったしおおらかで、誠実さがあつた。私が彼女を知ようになったのは、ちょうどこのような時期においてであつた。というのは、身分の高い婦人たちは、ひとたびその信用を失墜すると、もう宗教の流行らない今日では、芸術に対して気休めの関心を示すようになるからである。同じ身分の人たちから冷たい目で見られると、彼女たちは、作家、画家、音楽家の社会に身を落とすことがある。私は彼女がとても気持ちのよい友人だと思った。心に思っていることをなんでもずばずばといつてのける（そのため、有用な時間を大いに節約してくれるのだが）幸福な人間の一人で、なかなか機智のよく働く女でもあつた。彼女はユーモアまじりに、面白く、そのすさまじい色懺悔をいつもよるこんでしてくれるのだった。彼女の会話というのは、教養の裏付けこそなかったが、なかなか面白かった。いろいろ言いつ分はあつたとしても、正直なたちの女だったからである。

それから彼女はおどろくべきことをやつてのけた。四十歳の彼女が二十一歳の青年と結婚したのだ。友人たちは、彼女の生涯の中でも、これほど氣狂いじみたおこないはなかったといつて責め、これまでどんなことがあつても彼女の味方となってきた何人かの人たちも、その青年の氣立てがいうえに、またその青年の未経験なのにつけ込むのはいかにも恥ずべきことのように思ったので、こんどこそはその青年のためを思つて、もう彼女とはいっさい手を切るとまで言い出した。実際、それは狂氣の沙汰であつた。彼らは来るべき不幸を予言した。エリザベス・ヴァーモントという女は、どんな男でも半年以上守り続けることができなかったからである。いや、むしろそうなってくればいい、とさえ望んだのだったというのも、あわれな青年にとつては、自分の妻があんまりふしだらなことばかりして、自分から逃げ出さなければならなくなるといふのが、脱出の唯一の機会のように思われたからである。しかし人々の予想は見事に裏切られた。時がたつて彼女の心に変化が起つたためなのか、それともピーター・ヴァーモントの無邪氣な純粋な愛情が彼女の心に通じたのか、私にはよくわからないが、ともかく彼女が彼にたいしては模範

的な良妻になったということはたしかだった。かれらは貧乏だった。元来ぜいたく屋だった彼女も、つましい家庭の主婦となった。彼女は急に人の噂というものに気をつけるようになったので、口さがない連中もだまってしまった。夫の幸福が彼女の唯一の関心事のようになった。彼女の愛が献身的なものであることを誰も疑うことができなかった。あれほど世間の評判になり、それも長い間、噂の主になっていたのに、その後のエリザベス・ヴァーモントは、もうすっかり人の口の端にものぼらなくなった。この女の物語も結末を告げたかの観があった。彼女は生れ変わったような女になった。やがて彼女がすっかりお婆さんになって、誰からも非難されることのない数多の歳月を積み重ねるようになるれば、その過去のすさまじい乱行の生活も、彼女がかつておぼろげに知り合っていて、とっくの昔に死んでしまったある人間の話みたいになり、それが自分自身のものではないように思われる時がやってくるかもしれない。そう思うと、私はなんとなくおかしくなってきた。だいたい女というのは、羨むべき忘却の才能をもっているからである。

しかし運命が人々の前途にどんなものを用意しているか、誰にもわからないものである。一瞬にして何もかもがらりと変わってしまった。ピーター・ヴァーモントは理想的な結婚生活を十年つづけたあげく、バーバラ・キャントンという娘を氣狂いのように恋したからである。彼女は、かつて外務次官をしていたロバート・キャントン卿の末娘で、とても氣だてのよい、金髪色の、ふわっとした、きれいな娘さんだった。しかしもちろん、美しさという点では、エリザベス夫人とはとうてい比べものにはならなかった。ピーターのこの恋愛事件を知っている人は多かったが、果してエリザベス・ヴァーモントがそれに多少でも気づいているのかどうか、それは誰にもわからなかった。そして、いったいエリザベスが、今まで自分自身の経験には起こったことのない事態にたいしてどのような出方をするだろうか、と人々は興味をもっていた。愛人を棄てるのは、いつでも彼女のほうであつて、男のほうから彼女を振りするようなことはなかったのだ。

彼女はあの可憐なキャントン嬢を手っ取り早く片づけてしまふだろう、そう私は考えていた。彼女の勇氣と手腕とをよく知っていたからである。しかし、このようなことはすべて胸三寸のうちに秘められていたことであつて、外面はしらぬ顔で、彼女と昼食をしなから、私はしゃべりつづけていたのだ。彼女はいつものように、陽気で、魅力的で、率直だったのだ、その態度には、なやみごとなどもっているようなうすはみじんもなかった。彼女はふだんと少しもかわらない調子で、明るく、良識と鋭いユーモア感をもつて、次々に話題にのぼってくるいろいろな題目についておしゃべりをしていった。私は楽しかった。彼女はよっぽどおかしっていて、ピーターの心変わりには少しも気がついていないんだな、と私は断定した。おそらく彼女のピーターにたいする愛情があまりにも大きいので、ピーターの彼女にたいする愛情がそれに劣るなどとはどうにも考えられないのであろう。——そう私はひとりで自分に説明したのである。私たちはコーヒを飲み、タバコを二、三本ふかした。彼女は時間をたずねた。

「三時十五分前ですよ」

「あたくしお勘定を払わなくてはなりませんわ」

「今日はよく持たせて下さいませんか？」

「まあ、それはすみませんこと」

と、彼女はほほえんだ。

「お急ぎなんですか？」

「ええ、三時にピーターに会いますのよ」

「ああ、そうですか。いかがですか、ピーターさんは？」

「とても元氣ですよ」

彼女は例のゆっくりとした楽しげな微笑をたたえたが、私はそのほほえみの中に、ある種のあざけりに似たものを見てとった。一瞬、彼女はためらったが、それからゆっくりと私を見つめた。

「あなたは変わった事件がお好きのようでしたわね。でも、あたくしがこれからしなければならぬ用事がどんなものか、おわかりにはならないでしょう。けさほどあたくしのほうからピーターに電話をかけて、三時に会ってくれるようにたのんだんです。あたくしを離婚してくれるように、こちらのほうからおねがいするつもりなんです」

「まさか」と、私は大声をあげた。血が頬に上ってくるのを感じて、なんといつていいの自分でもわからなかった。「あなたがたはとても仲よくやっていたらしくると思つてました」

「世間のひとがだれでもご承知のことを、このあたくしだけが知らずにいるなんてことがあるとお思いですか？　いくらあたくしだって、そんなおバカさんじゃありませんわ」

彼女はこちらの心にもないことをいえるような相手ではなかったし、私のほうとしても彼女の真意がわからないような振りをすることなどできなかったのだ、私はしばらく口をつぐんでいた。

「どうしてご自分から離婚などしてもらおうとなさるんですか？」

「ロバート・キャントンといえば、堅苦しいお爺さんなんですよ。もしあたくしのほうがピーターを離婚すれば、あの年寄りにはバーバラがピーターと結婚することを許すかどうか、とてもあやしいもんだと思いますわ。それに、あたくし自身にとっては、離婚をされても別に大した影響などありませんものね。せいぜい、また離婚したのか、と人にいわれるくらいのところですよ……」

彼女はそういつて、美しい肩をすくめて見せた。

「ピーターがあの娘さんと結婚したがつているのがどうしてわかるんですか？」

「あのひと、あの娘さんに首ったけなんですよ」

「あなたにそう白状したんですか？」

「とんでもない。あたくしがもうそのことを知っていることさえまだ気がついていないんですから。かわいそうに、あのひとはあたくしの気持ちを傷つけないようにと、そりやもう一生けんめいなんですもの」

「きつと一時的にのぼせあがったってやつにすぎないんですよ。やがてさめるかも知れません」

思いきって私はそんなことをいってみた。

「どういたしまして。バーバラは若いし、きれいだし、それにほんとにいい人よ。あのふたりなら、まったくのお似合いというところでしょうね。そのうえ、たとえピーターの熱がさめたところで、あたくしとの仲がもとのようになるわけでもありませんわ。今あのひとたちはおたがい愛し合っているのですし、愛の世界では、現在だけが問題なんですからね。あたくしはピーターより十九年上ですが、男が自分の母親ぐらいの年の女をひとたび愛することをやめてしまえば、その女とまたよりをもどすなんてこと考えられますかしら？ あなたは小説家なんですから、それぐらいの人の気持ちをおわかりだと思いますわ」

「しかしなぜあなたはそんな犠牲を払おうとなされるんですか？」

「十年前、あの人があたくしに結婚してくれるようにとたのんだ折りに、もしあの人が解放してもらいたいと望んだときには、そうしてもいいとあたくし約束しましたの。だって、あたくしたちの年があんまり開きすぎていましたので、せめてそういうお約束ぐらいしておかないと、なんだか悪いみたいに思っただけなんですから」

「彼のほうから求めもしないのに、あなたのほうからその約束を果そうというわけなんですな」

彼女はあの長いほっそりした手をちよつと動かしたが、そのとき、あのにぶく光るエメラルドの色に何な不吉なものがあるように感じられた。

「ええ、そりやもちろん守らなくてはね。だれでも紳士らしくふるまわなくてはなりませんもの。実を申すと、あたくしが今日、ここでおひるをいただきますのも、そのためなんです。あのひとがあたくしに結婚の申し込みをしたのはちょうどこのテーブルだったんですのよ。あたくしたちふたりは一緒にここでお夕飯をいただいていたね。あたくしとしては、あの人がたいする気持ち、あの頃とちつともかわらないのが、少々つらうございますけど……」

彼女はしばらくだまっていたが、歯をくいしばっているのが私にもわかった。

「さあ、もう出かけなくてはいいじゃないね。ピーターは待たされるのが大きらいですよ」

彼女はなにか切ないような表情を見せた。彼女が自分の体をどうしても椅子から起こそうとする気になれないのを見ると、私は胸を打たれた。しかし、ニコリほほえむと、彼女はさも思いきったように、だしぬけに椅子からたちあがった。

「お供いたしましょうか？」

「じゃあ、ホテルの出口までね」

私たちが食堂と談話室を通りぬけて、入口のところへ来ると、玄関番が回転扉をまわしてくれた。タクシーを呼びましょうか、と私はきいてみた。

「いいえ、けつこうです。歩いたほうがよさそうですね。とても気持ちのいいお天気なんですもの」

彼女は別れの握手のため手を差し出した。

「あなたにお会いできてよかったですわ。あたくし、あした外国へ出かけますが、秋はずっとロンドンにいるつもりですの。その節はまたお電話でも下さいね」

彼女はニコリと会釈をして立ち去った。私は彼女がデイヴィーズ通りを歩いてゆくのを後ろから見送っていた。空気は相変らずおだやかで、春のようだった。屋根の上には小さな白い雲が青い空にもうげに浮かんでいた。彼女はほっそりとして美しいからだつきをしていて、道ゆく人々はみんな彼女のほうを見やった。知人らしい人が帽子に手をかけて挨拶するのに、彼女がいともしとやかに会釈をしているのが見えた。これが傷心の思いを抱いているひとであるとは、ゆめにも思えなかった。彼女はとても正直な女だったというのを、私はここにもういちどくりかえしておく。